

シン・研修報告書(外部研修) 富山県医療ソーシャルワーカー協会

テーマ

令和4年度地域防災対応力強化研修

「ともに考える地域防災 個別避難計画の重要性と利用者支援について」

主催：富山県社会福祉協議会・富山県福祉カレッジ

開催日：令和4年12月6日(火)

講義1：富山県福祉カレッジ学長 大橋謙策氏

講義2：倉敷地域機関相談支援センター施設長 永田拓氏

シンポジスト：大山地域包括支援センター管理者 前田一明氏

(福)氷見市社会福祉協議会障害支援課長 向井由美子氏

助言者：倉敷地域基幹相談支援センター 永田拓氏

コーディネーター：富山県福祉カレッジ学長 大橋謙策氏

参加者の声：富山市民病院 八木智矢さん

特に印象に残った内容①②についてご報告します。

①大橋学長よりこれまでの防災支援の取り組みと今後の課題について熱い講義を受けました。大橋学長は、日本MSW協会の10年以上に渡る宮城県石巻市の被災者支援にずっと関わっており、現場でのニーズを踏まえて被災者の生活再建を図ること、**長期的な視点を持つことが大切**であると強調していました。

また、大橋学長は72時間以内の救命・救急医療対応のDMATとは異なる、福祉避難所・仮設住宅等における生活支援としてのDWATの必要性を厚生労働省に長年訴えてきたそうです。その甲斐があって現在、各都道府県でDWATの整備が進んでいます。災害被災者と言っても様々な人達がいて、**福祉避難所さえあればそれでよいというものではなく、更に4階層化（①被災以前からの要支援者で社会福祉施設利用者、②被災前からの要支援状況で福祉サービスの利用者、③被災前は自立していたが被災により要支援状態になった人、④被災した当座は福祉避難所等での支援が必要であったが生活に必要なライフラインが復旧すれば自活できる人）**すること、そして、その支援・対応の違いを考え、より丁寧に細かく支援する必要があることを学びました。

②永田さんからは、H30年西日本豪雨の実体験を踏まえた貴重なお話を聞きました。永田さんが住む岡山県倉敷市の真備町は元々災害の少ない地域でしたが、豪雨と川の氾濫によって一晩で町が一変してしまったという説明を聞き、**富山も決して他人事ではないと感じました。被災当日の電話・メールのやり取り、町の機能が失われた災害時の状況を聞き、万が一への備えは本当に大切であると感じました。**

永田さんが長年支援していた知的障害を持つ利用者が、ご自身の子供と一緒に被災で亡くなった辛い経験には胸が詰まる思いでした。災害が起ってから考えて動くのではなく、災害が起こる前に個別避難計画を立てておくことが重要で、**「障害を持っている方やその家族は、備えることから逃げてはいけない」**とのことでした。災害時は、普通に生活している人でもパニックになるので、障害を持つ人や認知症の方には更に個別に配慮する必要があります。しかし、普段から関わりが無いとお互いを知らないの
で、やはり地域住民の関わりと情報共有、そして災害時の協力・参加は不可欠です。**永田さんによると被災したら全員が被災者と呼ばれ、平常時に使っていた高齢者や障害者という言葉は言わないそうです。**福祉事業所や行政、医療機関も日頃から意見を交わして**防災対応力**を高めていきましょ
うと締めくくられました。当協会でも災害支援に関する研修を今後行なっ
ていきますので、協会員の皆さんぜひ積極的にご参加下さい。

＜1995年の阪神淡路大震災を契機として社協の災害ボランティアセンターができましたが、今や社協の災害ボランティアで対応するレベルを越えており、これからは行政も民間も総力を挙げて災害支援を行なわなければなりません。＞

広報事業の一言つぶやき

外部機関の研修報告を自ら進んで出して頂いた八木さんには感謝の気持ちで一杯です。災害支援では平時の支援とは違うこと、防災対応力を高めるため日頃の業務の時から多機関との心が通わせお互いが信頼し合う関係性を構築し、災害時でも柔軟に対応できるようネットワーク等の強化が大切であると思いました。